

CLOSE UP

クローズアップ

金城学院大学

川瀬 正裕
教授

心理学、教育学を専門分野とし、児童思春期の心理臨床や障がい児とその家族への援助、地域における心理臨床活動の研究を行う。日本心理臨床学会、日本児童青年精神医学会、日本心理学会、日本教育心理学会、日本青年期精神療法学会、日本学校メンタルヘルス学会所属。(社)愛知県臨床心理士会会長。

自己理解を深め、お互いを認め合い 自分らしく生きられる人に

子どもの頃から人とかかわることが好きで、心理学の道を選んだ川瀬先生。

発達障害支援を専門に学校での特別支援教育におけるシステム作りを研究・構築されるかたわら、

授業では実践を通して、学生たちが発達障がい児教育の現場で役立つ力をつけられるよう、教えていらっしゃいます。

また「自己理解を深めることでお互いに認め合える」と話し、

学生たちには自分を大切にしてほしいと願っていらっしゃいます。

「相互障害」の考え方が 今の研究のベースに

1人っ子のせい小さい頃から私は人に興味があり、かかわるのが好きでした。喘息で体が弱く、発作が出て学校を休むこともありましたが、学校へ行くと友人たちと思いきりはしゃいで遊びました。その結果、また発作が出て学校を休む、ということもありましたが、とにかく友達と一緒にいるのが楽しくて仕方なかったのです。

人のことをもっと深く学ぼうと決めたのは高校のときです。人にかかわることという、たとえば医学もそうですが、私は日常生活レベルでの人の心理を学びたかったので、心理学へと進みました。

大学時代の学びで今の自分の礎となったのは、3年の時にはじめた自閉症の子どものボランティアです。国の保健機関で週に一回、自閉症の子どもたちと遊ぶというのがその内容でした。最初は「この子たちのお世話をしっかりしよう、能力を伸ばそう」と思って頑張っていましたが、実はそれがおごりであり、「相互障害」だということを知りました。私たちも障がい児が何をしたいのか、いいたいのかを理解できない障害を持っているということです。つまり相手にとっては、こちらが障がい者なのです。この考え方は臨床活動と研究のベースとなっています。

また臨床的な活動のひとつとして、幼稚園教諭や保育士の心理的な養成にも携わっています。日々多くの子どもたちと接する幼稚園教諭や保育士は、子どもたちの様子から早い段階で障害を見つけることができます。早期に見つけ、それをどこへつなげるかを判断

する力をつけることが、大切なことだと考えます。



人とのかかわりが 自己理解につながる

大学では発達教育心理学ユニットを担当し、子どもの発達障害や教育について教えています。特に特別支援教育と障がい児援助という科目では、実践的な学びを行いながら障がい児教育への理解を深めていきます。たとえば障がい児に字を教えるにしても、その方法はひとつではありません。そのとき学生が突然思いつくアイデアもあり、正解はないのです。これらの学びを通して、将来学生たちが障がい児教育の現場で、より多くのアイデアを生み出せるように

力を養っています。

私自身は、医師、教員、保育士、保健師などの多職種連携を踏まえた特別支援教育のシステム作りを研究しています。今や障がい児援助や特別支援教育は学校だけでは解決できず、文部科学省も「チームとしての学校の在り方」を提案し、教師だけではなく多様な専門性を持つ人々との連携の必要性を掲げています。こうしたシステムを構築するために、実際に学校や幼稚園の先生方と一緒に考えながら臨床実践を行ったりしています。

障がい児と私たちがお互いに理解し、認め合うには自己理解を深めることが大切です。自分の存在意義を知ることができ、心にゆとりができ、相手を認められるようになります。そのためにはまず人とかかわることが大切です。いろいろな人とかかわる中で自分という存在が見えてきます。自己理解を深めることで、自分らしくいられることができるのです。学生の皆さんには自分の存在をきちんと認め、自分らしく生きてほしいと願っています。

川瀬先生はどんな人!?

大学院の指導生に聞きました。「優しくサポートをしてくださる」「悩みも聞いてくださる気さくな先生です」と温かいお人柄の先生に感謝の声が聞かれました。実習でも「穏やかな口調で指導してください」「相談しやすく信頼できる先生です」と学生から親しまれ、頼りにされている様子が窺えました。

